

1. 学生確保の見通し及び申請者としての取組状況

① 学生確保の見通し

ア) 定員充足の見込み

図1に国際連携生命農学専攻の概要を示す。

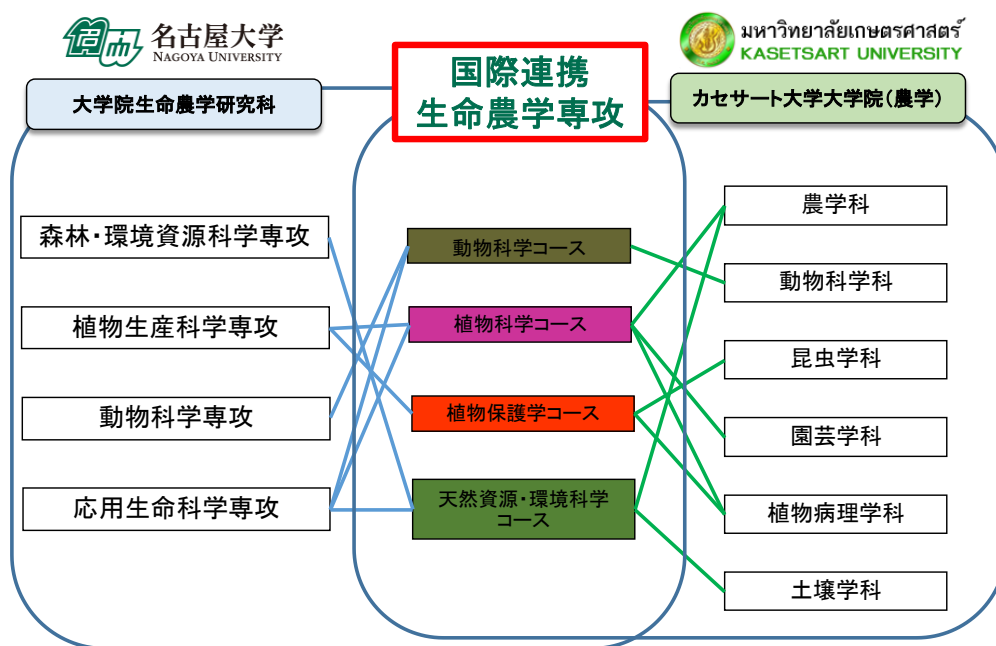


図1 国際連携生命農学専攻の概要

自然科学分野における国際的リーダーとなりうる博士人材の育成に向け、一つの大学だけでは提供できない魅力ある新たな教育プログラムを構築し、修了者には2大学連名で単一の学位を授与することによって当該学生の能力の高さを世界標準で保証すべく、カセサート大学との国際連携生命農学専攻を設置することとした。

名古屋大学は大学教育のグローバル化のための体制整備を積極的に進めており、大学の世界展開力事業（ASEAN 地域における大学間交流の推進）、国立大学改革強化推進補助金事業（アジアを中心とする国際人材育成と大学連携による国際化の加速度的推進）等に採択され、生命農学研究科もこれらに参画している。本ジョイント・ディグリープログラム（以下 JDP という。）は博士課程後期課程3年間にわたって本学とカセサート大学が協同して国際的俯瞰力と学術展開力を持った人材育成を行うものであり、後述する社会（企業）からの要請と学生からの要望（国際的な研究を行うための調整能力やリーダーシップを身に着ける、等）を同時に満たすことができる教育体系を備えている。一方、カセサート大学においても、これまでに多くの国際教育プログラムを展開しており、多数の学生が日本や諸外国に留学している（ダブル・ディグリープログラムは10大学、JDPは2大学）が、日本

の大学との JDP 開設は本件が初めての事例となり、大きな期待を持たれている。平成 29 年 6 月 26 日にカセサート大学バンケンキャンパスにおいて「Science and Technology Cooperation relationship in Agriculture for Next Generation」と題した JDP に関わるワークショップを行った際にも、複数名の学生が参加して当該プログラムに強い興味を示している。

本 JDP の入学定員は 2 名とする。当該入学定員は、母体となる大学院生命農学研究科の入学定員の内数として設置すること、及び教員・研究体制の規模から判断して、博士課程後期課程のきめ細やかな研究指導を十分に行える定員とした。「イ）定員充足の根拠となる客観的なデータの概要」にあるように、本専攻の学生は確保できる。大学ごとの入学定員については、教員の指導体制を考慮し、1 名とする。

なお、両大学の学生数は、年ごとには正確に等しくなくても構わないが、本専攻の運営期間を通して均衡を保つよう合同運営委員会で検討し、不均衡がある場合は調整する。

イ）定員充足の根拠となる客観的なデータの概要

1. 平成 29 年度生命農学研究科博士課程前期課程 1 年生（159 名）を対象にした当初ガイダンス（同年 4 月 7 日実施）において、国際連携生命農学専攻についての概要を説明し、アンケートを採った。その結果、前期課程 1 年生の約半数（84 名）が当該プログラムに興味があるとの回答であった。さらに、後期課程に進学して当該プログラムに参画したいと希望した学生が 4 名おり、継続的に学生を確保できる見通しの基礎資料となった。
2. 平成 29 年 6 月 30 日及び 7 月 4 日に、農学部・生命農学研究科全学生を対象として当該プログラムをより具体的に示した説明会を実施し、10 名の学生が参加した。

以下、当日のアンケート結果を示す。

（1）参加学生の内訳は、

学部生：3 名、博士課程前期課程 1 年：3 名、同 2 年：3 名、後期課程 1 年：1 名であった。

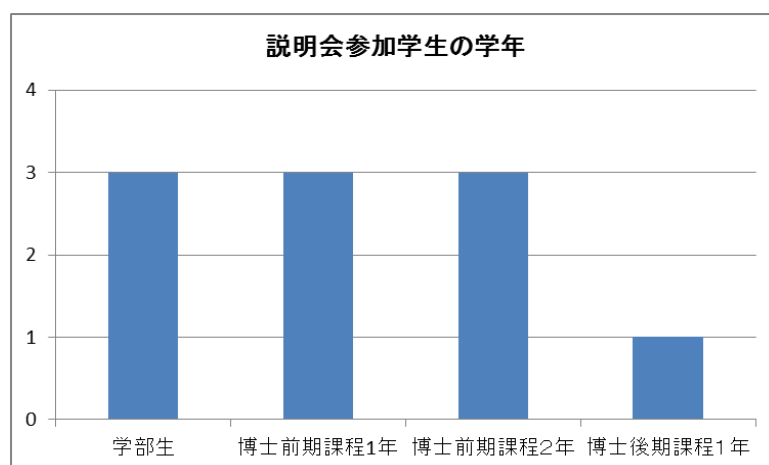


図2 参加学生の内訳

参加者は少ないものの学年が分散しており、当該プログラムに対して強く興味を持つ学生の参加が確認された。これにより、学生の確保が継続的に行えることが推定される。

(2) ジョイント・ディグリー制度については、

「知っていた」「なんとなく知っていた」と回答した学生が8名おり、当該制度の認知度が高まっていることがうかがえた。

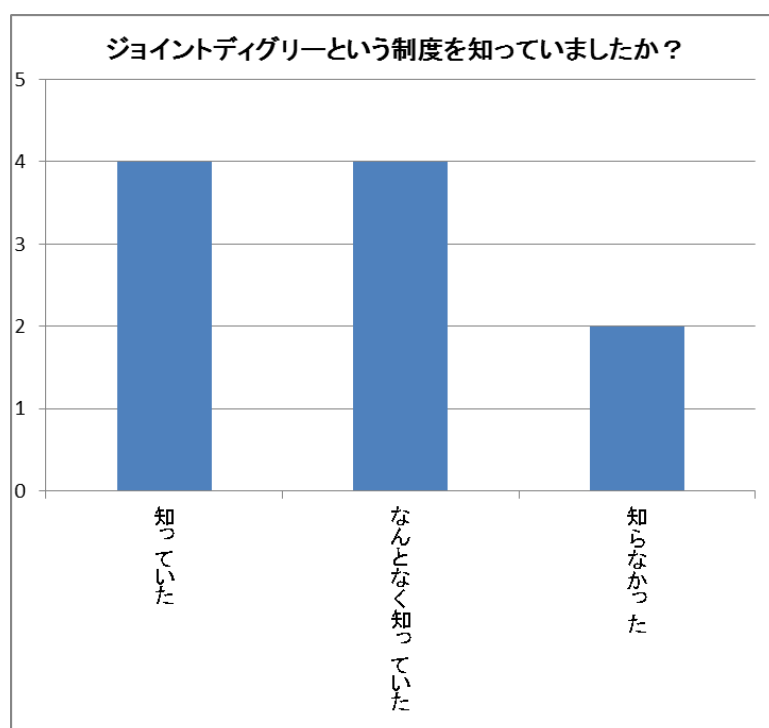


図3 ジョイント・ディグリー制度について

(3) カセサート大学については、

「よく知っている」「ある程度知っている」と回答した学生が4名おり、「名前は聞いたことがある」と回答した学生が4名であった。以上より、相手大学そのものよりも、当該制度に対する期待感が大きいと推測された。

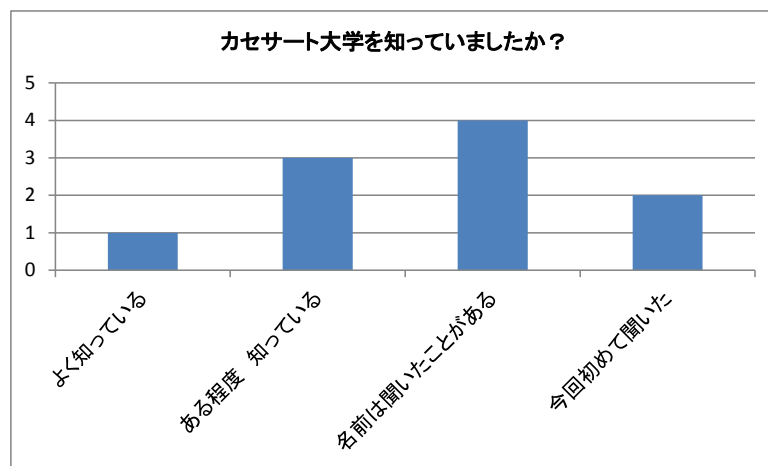


図4 カセサート大学について

(4) 当該専攻への入学については、

「ぜひ入りたい」「興味はある」と回答した学生が7名おり、今後継続して学生に情報を提供することによって、学生を安定して確保できると推測された。

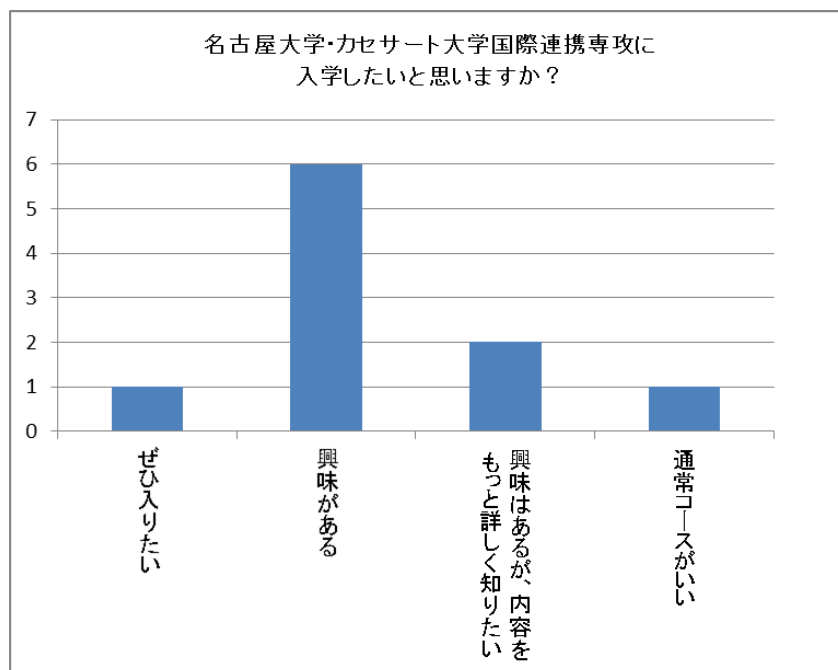


図5 当該専攻への入学について

(5) 当該専攻に期待することとしては(複数回答可)、

- A. 名古屋大学単独ではできない研究成果を上げたい：1名
- B. 国際的な研究を行うための調整能力やリーダーシップを身につけたい：3名
- C. 名古屋大学単独ではできない指導を受け、学識を身につけたい：1名
- D. 名古屋大学にはない環境で自分の研究を別の角度から見たい：4名
- E. 人的ネットワークを広げたい：1名

となり、JDP 設立の趣旨に合致した学生が潜在的に存在することがうかがえた。

これらを踏まえると、継続的な学生確保が可能であると判断できる。

3. 農学部資源生物科学科で実施されている「海外実地研修」は選択必修科目であるが、その参加学生数の動向から、学生自身が国際的視野と課題解決能力の涵養に強い興味を持っていることがうかがわれた。当該講義は、東南アジアにおける対照的な 2 つの国、途上国としてのカンボジアと先進国としてのタイの両国を本学学生が訪問し、約 10 日間の研修によって、農業の原点である開発途上国や熱帯農業の現状への理解を深めるものである。さらに、「海外学生受入研修」として、タイとカンボジアの学生が名古屋大学を訪問し、農学の基礎研究の体験や愛知県内各施設での研修を通して、日本の農学の現状について理解を深める交換留学スタイルのユニークな教育プログラムである。

表 1 は、「海外実地研修」の受講数(名古屋大学学生)の動向であり、表 2 は、「海外学生受入研修」としてカセサート大学から名古屋大学を訪問した学生数の動向である。これらから明らかなように、参加学生数は近年高い水準で推移しており、日本・タイ双方の学生自身が日本と東南アジア諸国の現状を理解し、その課題解決へ向けた取り組みに強い興味を持っていることが判る。

表 1 海外実地研修 参加者数推移

年度	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	合計
人数	5	11	21	36	29	27	35	37	37	238

表 2 海外学生受入研修 カセサート大学参加者数推移

年度	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	合計
人数	-	-	-	15	20	20	15	19	14	103

ウ) 学生納付金の設定の考え方

名古屋大学は、文部科学省の「国立大学等の授業料その他の費用に関する省令」に示され

ている授業料、入学料及び検定料の標準額をもって設定料金としている。一方、カセサート大学は教育プログラムごとに授業料、入学料及び検定料を独自で設定している。なお、主大学（入学した大学）のみ徴収し、副大学（連携大学）では徴収しない。

② 学生確保に向けた具体的な取り組み状況

○学生への説明

定員充足の大きな鍵を握るのは本学に在学している学生の進学動向であり、学生向けに説明会を開催するほか、JDP で行われる教育研究活動について説明し、就職状況や人材需要の実態についても明らかにした上で、進学を促す。

○保護者への説明

本学が毎年 10 月に実施しているホームカミングデイの際に保護者等懇談会を開催し、JDP について説明することにより、就職状況や人材需要の実態についても明らかにして、当該プログラムに対する理解を得るように努める。

○広報活動の強化

他大学や企業に対して、1) 研究科の紹介冊子を配布する、2) 説明会を開催する等の広報活動を積極的に行い、外部からの入学者増及び社会人学生の確保を目指す。

2. 人材需要の動向等社会の要請

①人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的（概要）

自然科学分野における国際的リーダーとなりうる博士人材の育成に向け、一つの大学だけでは提供できない魅力ある新たな教育プログラムを構築し、修了者には 2 大学連名で単一の学位を授与することによって当該学生の能力の高さを世界標準で保証すべく、カセサート大学との国際連携生命農学専攻を設置することとした。

名古屋大学が標榜する「アジアとともに学び、発展し、アジアのハブ大学」に成長するための具体的な博士課程・研究プログラムとして本 JDP を位置づけ、生命農学研究科が培ってきた生産農学、畜産学、農芸化学、森林学・林産学に関わる先端的な研究をカセサート大学が有する 370 ヘクタールという広大な農林地での実証研究として展開し、東南アジア地域でしか得られない豊富な遺伝資源を最大限活用した教育プログラムを実現する。これにより、両大学の特性特徴を活かした多角的かつ複数の学際的な視点を基盤とする国際的俯瞰力 と学術展開力を持った博士人材育成を行う。

また、学生を早期から長期間にわたって海外の学術環境、文化、システムの中で教育することにより、農学的な知識やさまざまな実験技法を習得するだけでなく、異文化適応能力、企画力、問題解決能力を養うとともに、両大学の研究力及び教育力の国際的評価を獲得し、大学の国際発信力と競争力の向上を図ることは日本・タイ両国にとっても重要な事柄である。

②上記①が社会的、地域的な人材需要の動向を踏まえたものであることの客観的根拠

日本と東南アジア諸国の政治的経済的相互関係は年々強まり、この間を行き交う高度人材の需要が高まるとともに、大学における国際的な人材育成への期待も大きくなっている。

中部地域は、世界を代表するものづくり産業の集積地であるばかりでなく農業においても主要な生産地域であり、食品加工産業や林業・林産業も盛んである。一方、タイは、農業を経済の基盤として発展してきたが、1980年代後半以降、急速に工業化が進展したことに伴い、国内総生産や輸出に占める農林水産業の割合は低下傾向にあるものの、近年の輸出品目は、一次産品から加工し付加価値を高めたものに移行している。中でも鶏肉、コメを中心とする農業関連産業が育ってきており、日本への農林水産物輸出額も増加傾向にある（農林水産省ホームページ海外農業情報より抜粋）。また、タイの国土の4割は農地であり、農業がGDPに占める比率、農地面積、農業雇用、農村人口など多く関連指標は、他のASEAN諸国と比べても高いものの、1ヘクタール当たりの生産性がASEAN諸国と比較して低いことが大きな問題とされており、その解決が求められている。

そこで、本研究科が培ってきた、イネ分子育種、ケミカルバイオロジー、動物内分泌学、植物分子生物・病理学、農業昆虫学をはじめとする特色ある世界トップクラスの高い研究実績や食品化学、森林・林産科学を含む農学領域での極めて高い国際評価実績に基づいて本JDPを推進することにより、上記の問題解決に貢献できる人材を養成することは、日本・タイ両国の農林水産業分野での学術・技術交流の活性化や人材育成の進展に資するものであり、国際社会の要請に応えるものである。

また、2017年1月から3月にかけて実施された本研究科の組織再編に関わる企業アンケートにて回答のあった73社の中で、今後研究科の組織体制に期待することを自由記載で求めたところ、複数の企業から「日本国内だけではなく、農業が依然として主要な産業である開発途上地域を中心とする、海外における研究開発に関心を持つ人材の育成を期待する」、「東海地方随一の大学として、日本全国及び世界で活躍される優秀な人材を輩出してほしい」等、本研究科の国際的な展開を期待する意見が挙げられ、本JDP開設が社会的な要請に対応したものであることがうかがわれた。

名古屋大学 生命農学研究科 ジョイントディグリープログラムに関するアンケート

生命農学研究科ではカセサート大学(タイ)とジョイントディグリープログラムを行う計画があります。
そのニーズを把握するため、下記アンケートにご協力下さい。

なお、本アンケートにご記入いただいた内容は、アンケートの集計のみに使用し、
集計後の統計資料はニーズ把握以外の目的には使用いたしません。

設問は全部で 7 問です。

Q1. 現在の学年を教えてください。

- A. 学部生 (年) B. 博士前期課程 1 年 C. 博士後期課程 2 年 D. その他 ()

Q2. ジョイントディグリーという制度を知っていましたか？

- A. 知っていた B. なんとなく知っていた C. 知らなかった(本学卒業生)
D. 知らなかった(他大学からの入学)

Q3. 本日のオリエンテーションでジョイントディグリープログラムについて理解できましたか？

- A. よく理解できた B. 大体理解できた C. あまり理解できなかった
D. 疑問・質問がある ()

Q4. カセサート大学(Kasetsart University)を知っていましたか？

- A. よく知っている B. ある程度 知っている C. 名前は聞いたことがある
D. 今回初めて聞いた

Q4-2. 上の質問で A を回答された方、
あなたが考える カセサート大学の良さは何ですか？
当てはまるものを すべて選んで下さい。

- A. キャンパスの立地 B. 大学の歴史 C. 大学の精神 D. 教員・コースの多様性
E. 研究施設・設備 F. キャンパスの雰囲気 G. その他 ()
H. 特に無し

Q5. (今現在 博士後期課程進学を考えていない方も、仮定でお答え下さい。)

もし博士後期課程進学を考えるなら、ジョイントディグリー(複数大学により授与される共同学位)取得を目指す名古屋大学・カセサート大学国際連携専攻に入学したいと思いますか？

- A. ぜひ入りたい B. 興味がある C. 興味はあるが、内容をもっと詳しく知りたい
D. 通常コースがいい

Q6. (今現在 博士後期進学を考えていない方も、仮定でお答え下さい。)

もしあなたが上記国際連携専攻に入学するなら、在学中にできることとして、どのようなことを一番期待しますか？

- A. 名古屋大学単独ではできない研究成果をあげたい
- B. 国際的な研究を行うための調整能力やリーダーシップを身につけたい
- C. 名古屋大学単独ではできない指導を受け、学識を身につけたい
- D. 名古屋大学にはない環境で自分の研究を別の角度から見たい
- E. 人的ネットワークを広げたい
- F. その他 ()

Q7. 今考えている将来の進路を以下からお選び下さい。(複数回答可)

- A. 日本企業(研究職以外) B. 日本企業の研究職
- C. 日本の公的機関(研究職以外) D. 日本の公的機関の教育・研究職
- E. 海外の企業 F. 海外の大学での教育・研究職
- G. 国連・その他国際機関の専門職員 H. 自営業 I. その他

以上でアンケートは終わりです。ご協力有難うございました。

ジョイントディグリープログラムについて詳細を知りたい人は、氏名、所属、e メールアドレスを下記に記入ください。関連の情報を個別に提供します。